

# シノドスへの歩み みことばと共に 四旬節第五主 四旬節第五主日C年

小西広志

2022年4月3日

## はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は、2022年4月3日、四旬節第五主日です。主日のミサの三つの朗読箇所をシノドス的教会の観点から読んで、味わってまいりましょう。

## 見よ、新しいことをわたしは行う

今日の第一朗読は『イザヤ書』からですが、いわゆる第二イザヤ（40-55章）の一節が読まれます。紀元前539年から始まったバビロン捕囚はイスラエルの民にとって苦難の体験でした。捕囚の地で第二イザヤはペルシャ王キュロスによって捕囚から解放されると説きます。これは人々にとって受け入れがたい預言でした。なぜなら、まさか異邦人の王、キュロスが自分たちを解放するとは思ってもよらなかったからです。しかし、イスラエルの人々は異邦人すらも使って自分たちを救おうとなさる神さまの想いに触れていきます。

今日の朗読箇所「見よ、新しいことをわたしは行う」（43章19節）と神さまはおっしゃいます。そして、具体的な内容が続きます。「荒れ野に道を敷き、砂漠に大河を流れさせる」。道がなき場所が「荒野」です。川なき場所が「砂漠」です。そんな人を寄せつけないような土地に道を敷き、大河を流すというのは、まさに常識では考えられない「新しいこと」なのです。続く20節では「野の獣、山犬や駝鳥もわたしをあがめる」とあります。ヘブライ語原文をよく見てみると、ここに理由を表す接続詞があります。「キー」という小さな単語です。フランシスコ会訳を見てみると、この接続詞を意識して訳されています。「荒れ野に水を、荒れ地に川を流したことで 野の獣も、ジャッカルの、駝鳥も、わたしを崇める」（20節）。荒れ野や砂漠に住む卑しい動物たちも神さまを崇めるようになるのですから、ましてやイスラエルの民は「新しいことを」なさる神さまを崇め、その「榮譽を語ら」（21節）しなければならないのです。

## キリストの内にいる者

第二朗読に移りましょう。『フィリピの信徒への手紙』から読まれました。9節にある「キリストの内にいる者」という表現をここに留めたいものです。パウロは「肉に信頼をおく」（3節）人でした。つまり、主キリストとは無関係に自分の力で生きようとしていたのです。割礼を受け、そして律法を守って、自分の力で義、すなわち正しさを手に入れようとしていました。そんな肉に信頼をおいた生き方を今日の朗読の直前の箇

所でパウロは告白しています（5 - 6 節）。

しかし、パウロにとって、かつて有利だと思いこんでいたことは「一切の損失」、「塵あくた」（8 節）と思えるようになったのです。「キリストに結ばれた者」（9 節 フランシスコ会訳）であることこそが何よりも大切なのだと気づいたのです。キリストの内にいる人、すなわちキリストに結ばれた人は、キリストの死に結ばれた人です。こうして、その人はキリストの十字架の死と一つになっていくのです。

## わたしもあなたを罪に定めない

今日の福音の箇所は有名な「姦通の女」のお話です。身をかがめて地面に何かをお書きになるイエスさま、それを見てイライラとして「しつこく問い続ける」（7 節）律法学者とファリサイ派の人々、そして真ん中に立たせられた「姦通の現場で捕らえられた女」（3 節）の三人にスポットライトが当たっています。「指で地面に何かを書き始められた」（6 節）の様子を見て、律法学者とファリサイ派たちはイエスとの論争に勝ったと思ったでしょう。女は石打の刑が待っていると人生をあきらめたでしょう。しかし、「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」（7 節）と言われて、律法学者もファリサイ派の人々も、そして女も、聖書の様々なことばを思い起こしたのではないのでしょうか。それは例えば「あなたは根拠のないうわさを流してはならない」（出 23 章 1 節）、あるいは「偽りの発言を避けねばならない。罪なき人、正しい人を殺してはならない」（出 23 章 6 節）だったかもしれません。つまり、律法の中ににじみ出ている弱者を守ろうとする神さまのいつくしみを表すことばに気がついたのではないかと思うのです。そうしたら、自分たちの方こそが汚れと罪にまみれていることを知って「一人また一人と、立ち去って」（9 節）しまったのです。再びイエスさまは地面に何かを書き続けます。

舞台に残されたのは女とイエスさまだけです。女性はことばを待っていました。律法ではない、新しいことばを。それが「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」（11 節）というイエスさまのことばでした。こうして、この女性は新しい生き方、新しいいのちを生き始めたのです。

## まとめ

今日の三つの朗読から見えてくるのは、新しい生き方です。あるいは新しい歩みです。その新しさを支えるのが第一朗読では神さまのことばであり、福音朗読ではイエスさまのことばでした。第二朗読では、パウロはキリストに結ばれることで、しかも十字架のキリストに結ばれることで新しい生き方を始めたのです。教会は常に新しくなります。信仰の共同体も常に新しくなります。信仰も常に新しくなります。人も常に新しくなります。

古人無復洛城東 古人 洛城の東に復（かえ）る無く、  
今人還對落花風 今人 還（ま）た落花の風に対す。  
年年歳歳花相似 年年歳歳 花相似たり、  
歳歳年年人不同 歳歳年年 人同じからず。

とは唐詩選ですが、

常に新しくなるためには、イエスさまの受難と死、復活にあやかることが必要なのです。

それではまた来週